

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770142

研究課題名(和文)中国語の複置形式の描写性に関する研究

研究課題名(英文)Research on Semantic Functions of Complicated Reduplication Forms in Chinese

研究代表者

池田 晋 (IKEDA, Susumu)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：40568680

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中国語の複置形式の代表とも言えるAABB形式について、形態と機能の対応関係を明らかにすることにある。本研究では、主に動詞から成るAABB形式、名詞性成分から成るAABB形式について、詳細な記述や統計調査をおこない、AABBの原型となる語の意味的特徴がAABBの機能と密接に関連すること、とりわけ原型が「小さな事物や動きの集合」や「限界性を持たない事物や動き」を表す場合にAABBの中心義である「多量性」が「遍満性」の意味を経て「状態性」へ変化すること、「状態性」を獲得した成員は述語や連用修飾語になりやすいことなどを論証した。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at describing the correspondence between morphological and semantic features of complicated reduplication forms in Chinese, especially the AABB forms. A comprehensive investigation was made of AABB forms constructed from verbal or nominal morphemes using a large-scale corpus and some important features of AABBs were examined, for example (i) functions of AABBs have a close connection with their base forms; (ii) "increased quantity," the core meaning of the verb or noun AABB forms, often changes into "stativity" when its base form indicates small or unbounded objects; and (iii) these stative AABBs derived from "increased quantity" are often used as predicates or adverbial modifiers in clauses.

研究分野：中国語学

キーワード：重畳形式 複置形式 中国語 描写性

1. 研究開始当初の背景

「重畳」と呼ばれる現象は、これまで言語学界において中国語の個別的特徴の1つとして注目を浴びてきた。中国語においては重畳形式を構成できる語は品詞を問わず数多く見られるが、それと同時に複数の語から成る複雑な重畳形式も多用される。例えば“説説笑笑(にぎやかに談笑する)”“東奔西走(東へ西へ走り回る)”“一閃一閃(ちかちかと光る)”のようなものがそれにあたり、「重畳形式」の中の特殊な一類として「複畳形式」などと呼ばれてきた。

これまでの中国における複畳形式に対する研究は、主に複畳形式に分類される表現形式の中から1つを選び、それについて記述をおこなうという個別研究が中心となっていた。しかし、個別研究の欠点として、全体に対する視野が欠けており、複畳形式全般さらには重畳形式全般に共通する本質的特徴の解明が進んでこなかった。一方、日本では反対に全ての複畳形式に対する俯瞰的観点からの研究が進められており、重畳形式や複畳形式には「描写性(大河内1969)」という機能的共通性があることが示されてきた。しかし、こちらの研究にも、「描写」という概念の明確な定義付けがなされていないことに加え、実際には多様な特徴を持つものを「描写」という一語でまとめてしまっているという問題点があった。中国と日本の複畳形式に対する認識は大きく乖離しており、そのため互いの研究成果を以って互いの不足を補い合うという作業が十分に進んでいなかった。

2. 研究の目的

1で述べたような背景をふまえ、本研究では双方の研究成果を有機的に融合すべく、俯瞰研究の提示した「描写性」の観点から、改めて代表的な複畳形式に対する詳細な記述をおこなうことを目指した。具体的には、(i)複畳形式の代表ともいえるAABB形式をモデルケースとして、描写の意味がどのような形で文中に具現化しているのか、または文脈の中で何をどのように描写しているのか、(ii)従来の個別研究で指摘されてきた「反復」「多量」などの文法的意味が「描写」とどのように関連付けられるのか、という側面に注目しながら記述・分析を深めていき、複畳形式における「描写」の実態を明らかにすることが、本研究の主たる目的である。

3. 研究の方法

複畳形式には多種多様な表現形式が含まれるが、その中でもとりわけ使用頻度が高く、多様な下位類を持つ形式として注目されているものに、AABB形式がある。本研究はもとより複畳形式の全面的記述を目指すものではあるが、より効率的に複畳形式の全容をうかがい知るために、研究期間中は、最も多彩なバリエーションを持つAABB形式の研究に専念することとし、個々の下位類

について様々な角度から分析を進めてきた。とりわけ、AABBの形態と機能に関する詳細な記述研究や、各下位類に対する統計調査を通して、「反復」「多量」といった文法的意味と描写性との繋がり、AABBの文法機能と描写性との繋がりなどについて全面的な分析を試みた。

4. 研究成果

(1) 動詞から成るAABB形式(以下、動詞AABB)について、記述研究と統計調査をおこない、動詞AABBの機能には、動詞AABBの原型となる語が二音節であるか単音節であるか、単音節語AとBの意味関係が類義であるか異義であるか、という点が深く関与していることを明らかにした。すなわち、二音節語を原型とするAABBは、動作様態の描写に特化する傾向が強く、連用修飾語として用いられやすい。これらのAABBにおいては、原型AB自身がすでに動作様態、あるいは動作反復といった意味を備えていることもあり、動詞複畳形式本来の文法的意味である「動作反復」の意味的作用は極めて希薄で、全体としてはむしろ「動作の異常状態」という意味に傾くことも多い。しばしば態度叙述文のような構文において、行為名詞やVOフレーズを主語にとる点がこれらのAABBの顕著な特徴である。一方、単音節語から成るAABBは、「動作反復」という動詞複畳形式本来の文法的意味を媒介として間接的に描写性を獲得しており、多く述語として動作主全体の状況を描写するのに用いられやすい。これらの中には、描写の働きが弱く、むしろ動作としての特徴を色濃く残す成員が少なからず含まれているが、とりわけAとBが異義関係にあるAABBは、動作性の強さが際立っている。これらのうち一部の成員においては、AとBの間に時間的な前後関係の意味が明確に認められることから、意味的にはむしろ連動構造に強く傾斜しているとみなすことができる。また、そのほかの一部のAABBは、動作性の意味から更に進んで「習慣性」の意味を獲得しており、総称名詞としての用法を持つまでに至っている。

表1 AABBの形態と機能の対応関係

機能	AABBの原型動詞			
	AB	A=B	AB (反義)	AB (関連)
個体の描写				
複数体の描写	×			
時間展開描写	×	×		
汎説義	×	×		
総称用法	×	×		
主な文法機能	連用修飾語		述語	

(1)の分析結果は表1のようにまとめることができる。表1からもおおむね、A A B Bの原型が二音節語から単音節語に、単音節語A・Bの意味関係が類義から異義へと複雑化するにつれて、描写のあり方も多様化していく状況を読み取ることができる。

(2) 名詞性成分からなるA A B B (以下、名詞A A B B) について、電子コーパスを用いた統計調査を実施し、各語の文法機能について分析をおこなったところ、名詞A A B Bに属す各語の機能もやはり一様ではなく、専ら主語や目的語になる成員が大半を占める一方、一部に連用修飾語用法や述語用法に特化する成員がみられることが明らかになった。また、実際の用例分析の中では、名詞A A B Bの主語用法と連用修飾語用法、独立して節を成す用法と述語用法の判別が困難になるケースが散見されることも明らかとなった。この事実は、多量に存在する事物は、それが動作主や属性主となる場合であっても状況描写的側面を兼ね備えること、単に存在を指示するだけでも叙述たりうることを示唆しており、今後の更なる分析が俟たれるところである。

名詞複置形式本来の文法的意味である「多量性」についても、典型的成員には顕著にこの意味がみられるのに対し、述語用法を持つ一部の成員ではこの意味が希薄化し、代わりに「状態性」の意味が生じていることが観察された。

(3) (2)の統計調査の結果をふまえた上で、さらに述語用法を備える一部の名詞A A B Bに関して、詳細な考察をおこなったところ、それらのうち、メトニミーを通して意味拡張を起こした成員を除くと、それ以外の成員には、意味と文法機能の両面において興味深い共通性がみられることが明らかになった。すなわち、これらのA A B Bは、統語的にはほとんどが空間を主語にとるものばかりであり、意味的にも「特定の空間における物質の遍満状態」を表すという点で一致が見られるのである。また、これらのA A B Bは、原型となる名詞A Bが「極めて小さな物質」もしくは「限界性を持たない物質」を表すという点でも共通している。以上のことから、これらの物質によって構成される「内部均質的な集合体」が、ある特定の空間を覆いつくす場合に、「表面・内部の異常」という「状態」の意味が顕在化し、述語として状況描写をおこなうことが可能になるのだという結論を示した。

一方、ごく少数の名詞A A B Bについては、「メトニミー」が述語化・状態化に深く関与していることも明らかとなった。例えば、“風風火火”が「勢いのあるさま」を表すことができるのは、「風と火が同時に存在する状況」がしばしば「風にあおられて火が勢いを増

す」という事態を引き起こすからにはほかならない。こうした2つの事態間の隣接性が動機となって、原因によって結果を表すという「因果関係のメトニミー」が成立しているものと考えられる。

(4) 上記(1)(2)(3)の結論をふまえた上で、動詞A A B Bと名詞A A B Bの双方において複置形式本来の文法的意味が薄れ、状態性が顕著化する現象について、両者の間にみられる共通性を明らかにすべく、更なる考察をおこなった。その結果として、動詞A A B B、名詞A A B Bのいずれにおいても、「遍満性」と「メトニミー」が状態義の前景化に深く関与していることを指摘した。とりわけ、「遍満性」という意味概念は、複置形式本来の文法的意味とA A B B形式の描写機能とを繋ぎあわせるキーワードとして、極めて重要であると考えられる。従来、名詞A A B B本来の文法的意味が「多量性」であるのに対し、動詞A A B Bの文法的意味は「動作反復」とされてきたが、実のところ後者の意味も「多量性」の一種であると見なすことが可能であり、そのような観点から見ると、動詞A A B Bと名詞A A B Bの両方において「多量性」の喪失が状態化を引き起こす直接的な動機となっていると考えることができる。すなわち、多量性を喪失し、数量概念の希薄化した「均質的集合体」が、基本動作中に「遍満」する消極的態度や空間中に「遍満」する表面・内部異常と解釈されることで、状態性が顕在化するのである。この結論は、A A B B形式の描写機能が「特定の領域における遍満状態」と密接に関わっていることをも示唆するものである。

(5) 重畳形式や複置形式と関連性を持ちうる表現形式として、“誰先回家誰作飯(先に帰った者がごはんを作る)”のような前後で同一の疑問詞を呼応させる構文(以下、疑問詞連鎖構文)を取り上げ、先行研究の問題点を整理したうえで、構文が持つ基本的な特徴について初歩的な考察をおこなった。

疑問詞連鎖構文については、従来の先行研究で前後の疑問詞が同一の対象を指すこと、特定の事態と一般的事態の両方を表すことができること、構文の核心的意味として「規則」の意味が挙げられること、などが指摘されてきたが、いずれの先行研究においても「なぜ同じ疑問詞を前後で繰り返す必要があるのか」という構文の内部構造に対する問題意識が大きく欠如していた。代名詞による照応ではなく、敢えて同一の疑問詞を繰り返すという余剰性や、「規則」という核心的意味と2つの疑問詞の間にどのような必然性があるのかといった問題について、これまで十分な説明が与えられたことはなかった。疑問詞連鎖構文の構造と意味の対応関係は未だに明らかになっていないと言ってよい。

本研究ではコーパス調査に基づき、疑問詞

連鎖構文が、大きく分けて 意思表示・命令・警告、已然の事態に共通する法則性の表明、状況描写、の3つの場面で用いられることを確認することができた。このうち、 の用例数が群を抜いて多く検出されたのに対し、 や は用例数が比較的少数にとどまったことから、 の用法こそが当該構文の最も中心的な用法であるという予測を示した。この点は、今後の更なる調査によって検証していくとともに、これらの機能的傾向性と2つの疑問詞との関連性についても本格的な考察を進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

池田晋、中国語 A A B B 型重畳形式の多量性と状態性に関する試論、外国語教育論集、査読有、vol.38、2016、pp.29-44

池田晋、漢語名詞 A A B B 式中状態性凸顯的語義条件、the Bulletin of Chinese Linguistics、査読有、vol.8-2、2015、pp.289-300

松江崇、荒木典子、池田晋、今井俊彦、学界展望(語学)、日本中国学会報、査読無、67号、2015、pp.64-77

松江崇、荒木典子、池田晋、今井俊彦、学界展望(語学)、日本中国学会報、査読無、66号、2014、pp.62-74

[学会発表](計5件)

池田晋、“誰”が何を? “誰先回家誰作飯”構文再考、中国語文法研究会第29回例会、2015年11月29日、筑波大学東京キャンパス(東京都文京区)

池田晋、漢語 A A B B 式謂語的語義類型分析 兼談數量与程度量的互動現象、第十八屆現代漢語語法學術討論會、2014年10月27日-28日、マカオ、中国

池田晋、A A B B 型述語における「數量」と「程度」の接点、中国語文法研究会第22回例会、2014年10月4日、筑波大学東京キャンパス(東京都文京区)

池田晋、A A B B 型名詞重畳形式における状態義の成立条件、2014年2月1日、中国語文法研究会第18回例会、東京大学本郷キャンパス(東京都文京区)

池田晋、試論名詞重畳 A A B B 式語義類型与句法効能的關聯 2013年8月11日-13日、Li Fang-Gui Society Young Scholars Symposium、シアトル、アメリカ

[図書](計1件)

池田晋、A A B B 型動詞重畳形式の形態と意味、白帝社、『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』、査読有、2013、pp.177-196

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 晋 (IKEDA, Susumu)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号： 40568680